

# 山口県宇部市北部地区における美術による 地域振興の一事例について

中野 良寿・福田 隆真\*

A Case Study of Encouraging in Local Development Through Art in the North  
District of Ube City in Yamaguchi Prefecture

NAKANO Yoshihisa, FUKUDA Takamasa\*

(Received September 25, 2020)

キーワード：地方行政・文化・地域振興・美術

## 1 はじめに

本研究は代表者である中野の継続研究の一つである。地域の活性化と美術活動との関連を具体的に研究を開始したのは2010年－2012年の文部科学省科学研究費補助金による調査である。(注1)本研究もこの研究のコンセプトを基盤としている。

都市の文化活動による活性化の活動は、昭和62年に閣議決定された第四次全国総合開発計画によって奨励された地域振興の一つである。(注2)特に地方都市においては、定住人口に加えて観光、交流による流動人口の増加による地域の活性化を期待し、全国各地で美術、音楽、演劇、スポーツなどの活動を媒介として活性化が試みられた。美術活動も当然、アートという広義の言葉によりより親近感を持ちながら活性化の活動が実施されてきた。本稿ではこれらの一環として、山口県宇部市で1961年から開始された「宇部ビエンナーレ 現代彫刻展」に関連する近年の宇部市での美術活動を紹介する。

宇部市は「宇部ビエンナーレ」を中心として、2015年度から合併後の北部地区の旧楠街を含んだ「まちじゅうアート」の一環として北部地区の活性化を進めてきた。地域の活性化の文化活動を、単にアート、現代美術だけで実施しても限界がある。(注3)本稿ではそうした考えにもより、美術だけでなく、地域の食文化、サークル活動、歴史的遺産の再評価などを包括して実施された文化活動を記述し、問題と可能性を考察する。

宇部市における市全体の芸術活動としては2015年から始められた。それは宇部ビエンナーレと同時開催する

ことによって活動の活性化を図るものであった。2015年には「第26回UBEビエンナーレ×まちじゅうアートフェスタ 2015 ～アートがつくるまちがある」と題して、彫刻展、まちじゅうアートフェスタ、うべの里アートフェスタ、宇部市芸術祭が開催された。これらの活動に加えて「食」と題して食文化の啓蒙、再認識を目的とした文化活動を開催した。

2017年では、「第27回UBEビエンナーレ×まちじゅうアートフェスタ 2017」として開催した。キーワードには「楽」とするコンセプトを加えた。具体的活動は前回の4つの活動であった。さらに2019年には「UBEビエンナーレ×まちじゅうアートフェスタ (UBEアートフェスタ2019)」と活動の一貫性や持続性のために若干の名称変更を行った。

来場者数は総数では2017年が165,763人に対して、2019年には180,739人と増加した。しかも増えた会場は「うべの里アートフェスタ」が主であった。こうしたことから本稿では宇部市の北部地区の美術活動について述べる。

## 2 山口県宇部市での「現代日本彫刻展」など芸術による環境整備及び地域振興事例について

先述の通り本稿では2010年－2012年以来の地域の活性化と美術活動についての研究課題について、筆者が住む山口県の宇部市における事例を調査、考察した。ただし、宇部市は炭鉱の産業が栄えた地方都市で第二次世界大戦における戦災からの高度成長期の復興において公

\* 山口大学名誉教授、宇部市文化振興まちづくり審議会会長

害が1960年代に大きな問題となり、その問題を克服するべく「花と彫刻によるまちづくり」、すなわち1960年代から始まる「彫刻によるまちづくり」に取り組んできた「現代日本彫刻展」が行われる都市として有名である。国内では日本で一番古い彫刻展としての知名度があり、宇部市の「ときわ公園」を展示場所とし、2年に一度の国際彫刻展として国内外からのコンペ形式で公募される。選考作品は模型審査を経て、およそ10名前後が選考委員により選ばれ、実作をときわ公園の一角で展示している。

2年に一回行われていたことから、2009年からは「UBEビエンナーレ」の呼称で継続されている。本稿ではこの「UBEビエンナーレ」を中心としながら、宇部市全体の文化的な底上げや地域振興などを意図したプロジェクトやイベント、展覧会、アーティスト・イン・レジデンスなど多くの企画が行われている現在の状況において、平成の大合併によって宇部市と統合した北部地区が一番、新しい事例としてあげられることから、それらを紐解く端緒として宇部市の北部地区(図1)で展開してきた宇部市吉部地区地域振興課のスタッフに2015年から2019年にかけて行ってきたことをインタビュー取材した。本稿ではこの取材内容を元にしての事例報告及び解説や考察を行う。

## 2-1 北部地域におけるこれまでの事例について

平成の大合併により6つの郡部が合併してできた宇部市北部地域は、在住の地域住民でさえ、宇部市の一部として認知することを最初は若干の抵抗があったことは想像に難くない。以下のインタビュー内容からは従来の、農業や林業を主産業としてきた里山としての特徴と宇部市がもつ炭鉱や工場などの産業文化の産物でもある「彫刻によるまちづくり」との融合として北部地区の地域振興課が市役所先導である程度発案し、広げてきたイベントやプロジェクトの展開、軌跡を生々しくたどることができる。

### ■山口県宇部市北部・農林振興部北部地域振興課インタビュー

〔2020年6月18日(金)収録〕(図2)(図3)(図4)

於：宇部市北部農林振興部(北部総合支所)

出席者：

○廣中昭久 宇部市北部・農林振興部北部地域振興課、部長(支所長)

○越智英和 宇部市北部・農林振興部北部地域振興課、地域振興係長

○馬場葉子 宇部市北部・農林振興部北部地域振興課、課長

○青山佳代 宇部市北部・農林振興部 次長

インタビュアー：中野良寿、福田隆真

## 2-1-1 アートフェスタの概要と経緯

Q：宇部市北部地区でのアートフェスタなどの地域振興の取り組みについて教えてください。

廣中昭久部長(以下H.A.):

山口県宇部市の北部地域中山間地域は人口減少が激しく、高齢化率も高い地域です。持続可能な手法で、北部地域が持つ自然豊かなこの地域の魅力、文化を継承していくため、アートイベントを契機になんとか盛り上げができないかということで2015年度にビエンナーレ方式(二年に一度の意)で始めました。

2019年度が本展に合わせての3回目の開催でした。主には北部地域に在住されているアーティストの人たちと「アート+食」で当初からスタートしました。食に関連する事業者さんとかと協力して種を広げながら徐々に形を変えながらPRしてきました。まだまだ申し訳ない状態ではありますが、途上の段階であり、新潟の越後妻有トリエンナーレ(注4)のように全国、全世界から来るようなイベントにはまだまだ程遠いのですが、地道にやっっていこうと思っています。北部地域の活動を地域にも知ってもらい、徐々に広がって来ているという状況にあります。第一回目の2015年度始まった「うべの里アートフェスタ」、「UBEビエンナーレ」を広げてやっっていこうとした流れで広報のために今までに多数のパンフレットを作ってきました。当初から担当している越智の方から説明いたします。

越智英和係長(以下O.H.):

「まちじゅうアートフェスタ」の一環として「うべの里アートフェスタ」があり「まちなかアートフェスタ」「UBEビエンナーレ」があります。パンフレット(図5)をご覧ください。2015(本展)、2016(間の年)、2017(本展)、2018(間の年)、2019(本展)と行われています。

2年に一度の「UBEビエンナーレ」間の年、本展ではない年はプレイベントをやっています。それぞれイベントをやっていて、2016年のものなどです。2018年はアーティスト・イン・レジデンスを行いました。2018年は『UBEラビリンス』という作品でこれが2018年のパンフになります。毎年やっている感じで現在はビエンナーレの2年に一度だけでなく活性化のため、毎年継続してやっているという感じですよ。

H.A.:

宇部市北部地区の様子を説明します。三地区、これが旧楠町のエリアになります。平成15年(2003年)に合併しました。15年くらい経っているのですが、いわゆ

る中山間地域というのは吉部、万倉、船木でして、それと小野、二俣瀬、厚東が北部地域6地区として宇部市になっています。したがって北部振興は6地区の振興を図るということになります。旧楠町のエリアの船木はこの建物の向かいにある「学びの森くすのき」という施設があります。また、これが図書館、歴史資料館の施設になります。合併後に作り直しました。設置時には施設名を募集して、施設見学も実施しました。すでに10年は経っていると思います。

それから万倉にできたのですが、「楠こもれびの郷」という施設があります。ここの施設のメインは温泉で合併前にここに温泉が発掘されたということでこれを活用しました。温度は低いのですが、温浴施設を中心に地域の食材を使った食事が提供できるレストラン（農家レストラン「つつじ」）と、野菜や加工品を売る農産物直売所（「楠四季菜市」という直売所）、それと農協の体験、研修ができる万農塾という公設民営で、地域に作られている「楠むらづくり株式会社」という会社が指定管理者として入っています。これができてから11年になります。

そこが一つの会場、もう一つのメイン会場が旧吉部小学校。吉部、万倉、船木は現在では一校ずつ小学校があります。過去に中学校が船木の楠中学校に統合されたのですが、吉部中学校が無くなり、それで吉部中学校が使っていた校舎を吉部小学校が使うことになりました。そのため旧吉部小学校の校舎が空いた状態になっていました。そこで廃校活用としてこの校舎を「うべの里アートフェスタ」のメイン会場としたのが特徴の一つです。その年にシンボルとして「UBEビエンナーレ」で賞（市民賞）を獲った『じいちゃんの鼻の穴をのぞいたら宇宙があった』（図6）（図7）という作品を設置しました。

旧木部小学校はイベントのメイン会場として活用しています。がそれだけではもったいないので、通年活用はできないかということで、地元のアーティストの方や食の業者さんやアートフェスタに関わってもらった方々に声がけさせていただいて、なんとかここを活用してイベントなり、ビジネスを展開していただけないかと持ちかけ、今は「うべの里生徒会（以下生徒会）」というグループを作ってもらっています。

「生徒会」は日常的に活動しています。小学校の職員室をカフェに改造して、そのまま職員室カフェというネーミングにしているのですが、1回目のアートフェスタから活用して、そのまま使っています。

毎日ではなく、毎週日曜日と月曜日に開いています。こういう風なところに広がりが出て来ているという状況です。

## 2-1-2 ランチ、「うべの里生徒会」の活動について

O.H.:

提供内容としてはランチを提供しています。毎週10-20人は馴染みの人が来ていると思います。食事以外に買いに来た人を含めればもっと倍ぐらいにはなります。

「生徒会」と名付けられた活動が2017年度くらいから本格化して去年、一昨年は5回くらいのイベントをやっていて、仕出し屋さんがお弁当を出したりもしていて、お弁当を含めればもっと利用者は増えると思います。ただし、本展の開催時は週末だけでなく2ヶ月くらいべったり関わってもらっています。

## 2-1-3 実施期間など

Q: 今年のUBEビエンナーレは延期されたのでしょうか。

O.H.:

一年空白、普通は間の年で模型を募集する年ですが延期になりました。来年がプレミたいになるそうです。

アートフェスタはこれまで全部で本展が3回、間の年が2回ほど行われています。

バスツアーも北部、まちじゅうとの絡みで行っていて、このパンフにはのっていないですが、色々な企画をやっています。2015年は船木でやりました。3ヶ月、コア日を設定して木部、真倉、船木それぞれイベント的に1日ずつ集客をしました。

## 2-1-4 彫刻作品の選定や、設置時のエピソードについて

O.H.:

『じいちゃんの鼻の穴をのぞいたら宇宙があった』の作品は寄贈という形でいただきました。この作品を選定したのは寄贈されたので頂いた感じなのですが、地元の意向を聞いたわけではなく偶然の要素が大きかったです。

選定委員会ではなく担当者がこの場所を選びました。2014年は本展の年で、私は担当として途中で異動したので、急遽対応して選定委員会などの記録が残ってないまま設置に至りました。その時、実は地元からは多少反対意見もあり、「生首」という言い方をする方もいて、高齢の方が多くそこはあくまでもアートですよと説明しています。木部にそういう場があったという話もあるのですが、刑場は全国どこにでもあり、そこは申し訳ないですが、スルーさせて頂いております。

当初そういった否定的な意見もあったので設置後は心配だったのですが、公開した後はたくさんのニュースなどに取り上げられ、今では地元の名物になっています。よく車を止めて鑑賞されている方がいますよ。通り道にこの彫刻があり、びっくりしてバス停に車を止めて写真を撮っています。

説明を見て、作品の中も気づいてみなさん覗かれています。このように反響があるというのはいい作品だと思います。「UBEビエンナーレ」の人気作品で、奨励賞も獲っているものです。

### 2-1-5 作品の物理的な強度、経年劣化について

Q：野外彫刻作品は従来何十年も維持できる素材で作られることが多かったですが、近年、作品素材の多様化で経年劣化や不具合が起り、長期の維持管理に耐えない作品も増えてきています。メンテナンスについてどのように考えていますか。

O.H.：

一度割れた部分があり、修復をしました。強度的にきつい部分もあり、風で飛ぶことはないと思いますが、作家の方に連絡を取ってメンテナンスを行っています。去年も作家の方に来て頂いて、ワークショップというかアートフェスタの時にメンテナンスをして頂きました。

ビエンナーレの作品全部に言えますが、物理的にダメになったら修復をするしかないです。その際、どちらが予算を出すのかという話で、基本的には設置している方がメンテナンスのお金をだすことになっています。アクトビレッジおのに設置されている『UBEラビリンス』も木の素材なので劣化します。ペンキ塗りのメンテナンスもワークショップにして行っています。そういう形で活用しながらできるだけ長く維持して、最終的には素材が木なので使用できなくなるのは仕方ないかなとは思っています。活用しながら今の所はできる限り長く置いときたいなと思っています。

修復イベントも楽しく、作家本人（豊福さん）をお呼びして余っている壁に絵を描いたり積極的にイベントとしてのワークショップをしたりして維持しています。FRP（注5）の作品には重力の問題があるので、気になるところもありますが、できるだけ維持していけるよう気を配っているところです。

### 2-1-6 校舎、トンネル、船木鉄道について

H.A.

会場の校舎も年月が経っていて築五十年です。こちらの校舎がいつ迄もつか、彫刻がもつかという感じです。この校舎は鉄筋の走りで、昭和39年くらいの建物で、耐震はしてなくて、耐震補強をする予定がなく、いずれは使えなくなるのではないかと考えています。近くに廃トンネルがあり、拠点としていいのですが、耐震をやると見た目も変わるし、お金をかけられないという状況があり、なかなか難しいですね。トンネルは文化財にはなっていないので、船鉄は略称でバスを運営しています。

元は船木鉄道株式会社で、鉄道も運営していました。

鉄道マニアは好きだと思いますが、まだそこまで観光名所になっていないと思います。廃線になったのは戦争の鉄の供出によって廃線になったようです。だから残念ながら線路は残ってないのです。

地域の町おこし団体がここを使って歩くイベントを行い、宇部の里関連でトンネルコンサート、音響なしの響きのみでやるコンサートなどもやっています。また、地域の団体がホームの復元なども行っています。ホームはトンネルの向こう側にあります。終着駅は西宇部まで行っていました。現在は面影がなくその当時を知っている方はほとんどいらっしゃらないですね。それに当時の写真もないです。記念ハガキまではあるのですが、廃線が早かったので探したのですがその当時の写真が結局探し当てられなくて。船木駅からのSLの写真は残っていますが、吉部の鉄道は全くないです。今はミニSLなどを走らせたりしています。吉部のコア日に三回連続でミニSLを走らせるイベントをやっていて、子供だけでなく大人にも人気です。（図8）（図9）

### 2-1-7 「生徒会」イベントの活動について

H.A.

2015年度に最初に始めて、本展との間の年は「生徒会」の企画を行いました。その中で次年度の本展のPRもしていきました。実際に通年で生徒会を行なったのは2017年からです。二回目は旧楠地区だけだったのですが、6つの地区でそれぞれの地区のコア日を設けて、秋のお祭りと引っ掛けてイベントを展開しました。メイン会場はあくまでも木部小学校とアクトビレッジおの（市の施設）をメイン会場に、他の地区はスポット的なやり方でやりました。

### 2-1-8 アクトビレッジおのと作品設置経緯、彫刻作品の形態について

H.A.：

アクトビレッジおのは2017年より加わりました。そして、この年はここに『UNTITLED』（図10）という大理石の彫刻を設置しました。パンフレットにおのデータと出ていると思います。

O.H.：

白い彫刻。重くてでかい彫刻です。場所にマッチしていて、作家さんがロケーションに満足してくれました。誰が見てもいいと言える場所に設置できたなと思っています。選んだのは、藤原鉄平先生と話して、だいたいのあたりを決めました。基本は展示委員を介して展示場所を決めることにしています。

H.A.：

UBEビエンナーレに関わる方も場所の方を決めてそこ

に合わせて作品を考案するような方法も考えているそうです。ここにあう作品を提案してもらうことも考えています。ミニチュアを提案して実物を作るやり方と、アーティスト・イン・レジデンスのやり方、場所があり、そこに合わせて彫刻を発案する三種類のやり方を考えています。

#### 2-1-9 彫刻作品の設置委員や設置場所について

Q：UBEビエンナーレとの関わり、野外彫刻の設置について教えてください。

H.A.：

UBEビエンナーレは1961年代以来の芸術と地域振興（まちづくり）を目指した日本における先駆的事例で、「環境との調和」がテーマだと思います。「うべの里アートフェスタ」ではUBEビエンナーレからではなく、逆にこちらからビエンナーレの方にも提案をさせていただいているところもあります。回を重ねて提案の仕方が徐々に変わってきています。また、作品の内容もかつては抽象が多かったけれど、現在は具象も増えています。受賞作品も具象が増えてきたということもあります。

O.H.：

一般の人には具象の方がわかりやすいと思います。全国的には最初に場所ありきの彫刻も増えてきていますが、宇部の場合はそうではないものが多い。また、その配置計画もなかなか難しいです。“どこに置くのか問題”があります。なんでここにこの彫刻があるのかと思うこともあります。設置委員さんは大変難しいと思います。宇部市だけでなく他の市でもいいけれど、先に彫刻設置の決められた場所があった方が作品も作りやすいのではないのでしょうか。

#### 2-1-10 イベントの来場者数や段取り、運用について

Q：イベントの来場者数、人の流れについて教えてください。

H.A.：

イベントの来場者数は増えてきています。いろんなところから来てくれていると思います。「生徒会」の活動を始めて、来てくれる人が増えました。特に2018年にはいろんなイベントを行いました。宇部と山口市の両方からこの宇部市北部はチラシを撒くと来てくれる人がいます。最初に比べれば来てくれる人が増えて、今年は何かないのという声をかけてくれる人、年間を通じて来てくれる人が増えています。

イベントを増やしたことで、イベントの段取りも含め、手がかかりすぎたことが事務サイドにありました。3回目には旧吉部、アクトビレッジおのに注力し、あとは民

間の助力をお願いする形になっています。いくつかの場所は公募で自主的に参加したい業者に入っただき、お任せでやっていただいている場所もあります。

#### 2-1-11 UBEラビリンス作品について

H.A.：

2018年の間の年にはじめてアーティスト・イン・レジデンスを行い、選ばれた豊福亮さんに作家として参加してもらい北部の小学生、市内の小学生にも参加してもらいアクトビレッジおの（10周年イベント）で、『UBEラビリンス』の設置をしました。2018年はそのようなことで、2019年はラビリンスの修復ワークショップということで行いました。ドローンでラビリンスを撮影したり経路も変えたりしています。活動的な作家さんで、フットワークが良いので、すぐに対応してくれます。前回のワークショップにも東京から車で来てくれました。（図11）（図12）（図13）

#### 2-1-12 イベントのメンバーや運用の工夫について

Q：実質やっているイベントメンバーは何人くらいで、どのようにやっていますか。

O.H.：

北部地域振興課の直営です。このイベントはうちの課がやっています。5人とか、たまに他の課にもお願いする場合もあります。地域振興係、北部農林振興部、北部地域農林振興課の所管ですね。当初、大変でした。ゼロベースでしたから。

H.A.：

2015年には、業者だけではなく地元の人たちが、自主的にやってくれるような形、地域の団体の方に入ってもらえたのが嬉しかったです。メイン会場を開けておくのはなかなか難しく、地域の団体の方に委託を出して誰かについてももらいました。

去年は宇部市出身の漫画家の人が活動を行っていて、以前は周南市で活動を行っていたのですが、今度は宇部市の小野で自給自足などをしながら漫画村のようなことをやっているのですが、漫画村の人にアクトビレッジおののこの受付業務を委託で手伝ってもらいました。

スペースをお貸して、彼らの活動を展示してもらい、様々な工夫を行いました。吉部は今回主婦などの女性会の方々にお願いしました。

O.H.：

2017年は広げてしまったので、職員がずっと現場に張りつくようなことをやってみましたが、あまりにも大変で、コア日も大変だったので、去年は地元の方々にお願いして、できるだけ適度に来るようにしました。たまたま旧小学校で活動しているのでグループの名前を

「生徒会」としています。「生徒会」のメンバーはケーキ屋、柳家さん、地元の事業者、地元以外もミニ四駆のおもちゃ屋さん（ホビーショップ ムック）なども入った業者さんたちです。おもちゃ屋さんは広いサーキットを探していてイベントに来てくれたり、店の宣伝になるのでミニ四駆を校舎のサーキットに置いたりしていました。またホビーフェス（注6）をやりました。これはたくさん人が来て大盛況でした。ぜひ続けていただけたらと思っています。

H.A.:

日曜日、月曜日は通年でやっています。平日は委託で活用してもらっています。使用貸借ということで、他の事業者にも貸しても良いことになっています。家賃、光熱費は行政持ちになっています。年4-5回のチラシを使ってPRしていますが、市内の小学校に配っています（宇部、美祢、山陽小野田など）。手作りの食や雑貨を作る人が結構いて逆に調整が大変です。一度出店した人たちはリピートしてくれます。一回やると1000人くらいの方が来てくれます。

フリーマーケットはときわ公園で年に3-4回行っていますが、こちらはマルシェとして行っています。ハンドメイドのマルシェ（食、雑貨など）。クオリティーが高いので、出店したい人は多いです。

## 2-1-13 移動手段について

H.A.:

移動は自家用車ですね。公共機関は船木から吉部へ百円のバスはあります。そこから100円で来られます。タクシーはいないです。船木から船鉄のバスで来ないといけません。去年は一日4便の無料のシャトルバスは出しました。「まちじゅう」と連携した市内と北部とつなぐシャトルバスです。費用対効果は意外と少ないのです。コア日は座るところがないほど利用者が多いが、平日は利用者が少ないのです。木部小ではグラウンドを自家用車の駐車場に使っています。

O.H.:

ほぼ自家用車ですね。自転車での移動は距離がありすぎて無理ですね。子供たちは自分で来られないので、それが残念ですね。本当は中学生なんかがいれば良いですがね。

## 2-1-14 今後の維持について、経済のこと

Q: 今後（持続すること、地域の人）の見通しを教えてください。

H.A.:

校舎と彫刻が持つ間は続けたい。地元の人たちが自分たちの活動だと思ってくれるようにしたいです。事

務所は木部小とアクトビレッジおのだけに注力したいです。アートの世界なので、好きな人たちに集まってもらい、PRして続けて行きたいです。今年はアーティスト・イン・レジデンス、本当はありましたが募集が新型コロナのために中止になりました。本展がなくても毎年やっているように続けていきたいです。「生徒会」さんにも、絡んでいただきイベントをやりながら継続していきたいが、ある程度儲からないと続けにくいです。地元が儲かり、経済が回ることが大事です。

「生徒会」も準備が大変で達成感もあるが、どれほど儲かっているかはわかりません。地域が回るのはいはり経済が回ることが大事です。地域が自分たちのイベントだと思ってくれるようにしたいです。地域に様々な事業者さんがいるのでそのような方々が自主的に参加できるアートイベントにしていきたいと思います。行政が関わるのは旧吉部小学校とアクトビレッジおのの二箇所と考えています。食あり、アートあり、ビジネスも展開していったら嬉しいです。アートには趣向によって好き好きがあるので、市民が全て参加できるわけではない、様々な企画をしてPRして、外から人を呼び込みたいです。ベースはだいぶできているので、ガラッと変える必要はないのではないかと考えています。これをベースにだんだん広げていきたいのが現状です（2020年現在）。

O.H.:

二年に一度、UBEピエンナーレが行われているが、間の年もなんらかのイベントをしながら繋げていきたいです。今年はアーティスト・イン・レジデンスを行う予定でしたが、コロナ禍につき先が見通せないです。二年に一回という言い方をやめて毎年何かやっているという形で行っています。会場は常にあるので、「生徒会」なども絡んでもらい、なんらかのイベント企画を行なっていきたいです。

継続していくのは、かなりエネルギーが必要なことで、エネルギーの元は人の笑顔ということもあるが、ある程度利益が上がっていくことが必要で、持続していくためにはなんらかの儲かることが地域の人にとっては大事です。

活性化には人が集まるだけではなく、地元が儲かり、経済が回っていく状況にならないと続けようという気にならない。「生徒会」については準備が結構大変ではあるが、それに見合う利益はまだ、そこまで上がっていないのが現状ではないかと思っています。

## 2-1-15 「生徒会」の構成について

H.A.:

部署が異動になり来所して5年目です。部署に来て途中機構改革で、農業振興と北部振興がくっつき、それか

らは3年になります。最後の年が新型コロナの流行の年になりました。

O.H.:

「生徒会」については7団体が正規メンバー、准会員4名がいます。サポーターが数名、15名程度で行なっているイメージです。何事も持続力が大事だと思います。民間で続けることが難しいところを役所がサポートしている感じです。「生徒会」はHPを現在作っているの、それを見れば、出店もできるし、販売もでき、ネットショップなどができればいいと思います。

H.A.:

ただ、現状では地域の構成員のことを考えると「生徒会」に変わる団体はないだろうと思います。

情報は「まちなかアートフェスタ」HPの中や宇部日報でも情報が出ています。せっかくここまでやって来たので、ぜひ今後も続けていきたいと思っています。

## 2-1-16 イベントでの経済効果や、ホビーフェスについて

H.A.:

チラシの量は多く今までで11枚もあります。経済効果は2017から2019へと以前より倍以上伸びています。この調子で頑張っただけで欲しいと思っています。

O.H.:

レースなどのホビーフェスが人気でした。カレーフェスは6店舗出店しました。キッチンカーやレトルト、食べ比べができる。ご飯を炊くのが間に合わなくたくさんの方が来ました。

ホビーフェスのハンドメイドマルシェは女性中心ですが、おもちゃなどのホビーは男性中心、お父さんと子供など、大人も含めて大人気でした。おもちゃは個人のお店が参加してくれています。プラモ、ラジコン、エアガンなどのお客が当日の対応などやってくれていることもありました。

おもちゃにはいくつかのジャンルがありNゲージ、ガンプラ、それぞれ賑わい、それぞれのマニアが集まっています。今年は11月15日にホビーフェス、またカレーフェスも企画しています。

## 2-1-17 新型コロナ対応について

H.A.:

今年は今からはコロナが収まっていない中でそのようにやるのが難しいです。三密、ソーシャルディスタンスの確保など難しい課題がたくさんあります。集まりすぎても困るし相反する要素に対応するのは大変です。試行錯誤するしかないと思います。人数制限すると売上げが落ちてくると思う。自粛に慣れてくるとなかなか、集まら

ないようになるのではないかと思います。

フェスを実施すれば来てくれるとは思いますが、増えすぎるとコロナの問題があると思います。どのようにして人数制限をかけるのかが課題です。

## 2-1-18 「生徒会」、今後の抱負、イベントのアイデアについて

Q: 「生徒会」をやっている人の年齢層と、今後の抱負を教えてください。

O.H.:

割と若い30代の人もいます。生徒会長は30代、店長は還暦、そのくらいの人が多いです。会員の出入りも多いです。ただサポーターとして地元の人たちも手伝ってくれるようになって来ました。

H.A.:

文化振興を考える上で官だけでなく地元が活性化して好きに展開できるようになるのが一番いいだろうと思います。経済的に自立していけないと続かない。達成感も大事だがそれだけだと厳しいと思います。

地元の企画に地元の人が、気軽に来られるのはいいところですが、毎年多くの企画を回していくことは本当に大変です。

O.H.:

種がなくなってくるとマンネリ化するので、視野を広げて色々やりたいと思っています。その中で、「わらアート」と「田んぼアート」は他の地域も行っていますが、今後やりたいです。「かかしアート」の規模は小さいが、30体ほど行ってみました。リアルな「かかし」は結構インパクトがありました。

様々なイベントは古民家を展示場にして行なったりしました。場所がないとイベントはできません。アクトビレッジおのについては稼働率が少ないので、なんとかしたいと思っています。将来この場所は「わらアート」などの活用もできるのではないかと考えており、「わらアート」などの研修会に参加などもしています。武蔵野美術大学の「わらアートチーム」（注7）が有名ですが依頼すると経費もかかるかなと思っています。地元の大工さんなどが参加したチームでやるといいかとも思っています。

「田んぼアート」については多分準備や場所の問題があり、この北部地域では難しいと感じています。アイデアを常に探していなければならぬのは大変です。何れにせよ全体の企画を続けていくのは本当に大変なことだと思っています。

ありがとうございました。

以上

### 3. 聞き取り事例から導き出される内容、彫刻など芸術作品による環境整備及び地域振興事例について

#### 3-1 アートフェスタ「アート+食」など地域振興全体の経緯

宇部市北部中山間地域は人口減少が激しく、高齢化率も高い地域である。文化・地域振興は2005年の「第一回うべの里アートフェスタ」から始まる。すでに宇部市の中心市街地では例年行われていた彫刻展、アートフェスタを北部中山間地域にも広げて、文化的な活動枠を広げて展開する試みであった。「アート+食」というキーワードも当初からあり、具体的には「UBEビエンナーレ」の会期に合わせ、「第一回うべの里アートフェスタ」、「まちなかアートフェスタ」、「宇部市芸術祭」及び「UBEグルメ」の4つの要素を絡めた総合企画として行われた。

この枠組みはアートを中心にしながらもアートだけに特化するものではなく、人口減少、少子高齢化、地域振興という問題に対応する意図があることが読み取れる。

ともすると合併後宇部市に組み込まれた地域であるものの、その要素を意識しにくいきらいがあったと思えるが、「まちなかアートフェスタ」や「UBEビエンナーレ」とつながることにより以前の郡部ではできなかった他の地域との連携や施策が可能になったのであろう。

#### 3-2 彫刻作品などについて

北部地区に設置されたUBEビエンナーレからの委嘱作品は、第25回UBEビエンナーレから佐藤圭一氏の『じいちゃんの鼻の穴に宇宙があった』というタイトルのFRP素材の作品、第26回UBEビエンナーレから西澤利高氏の『UNTITLED』という大理石が素材の作品がある。またUBEビエンナーレのアーティスト・イン・レジデンス部門から豊福亮氏の『UBEラビリンス』が設置された。

佐藤圭一氏の『じいちゃんの鼻の穴に宇宙があった』は北部地区でのアートフェスタを始めるにあたり、旧吉部小学校前の道路沿いに設置され、北部地区でのアートフェスタ全体を代表するようなシンボルやランドマークとなった。少子高齢化で人口減少が進む山間部において、高齢の男性の頭部の具象的な彫刻イメージは大変印象深いものであるとともに、一方で、その鼻の穴の部位から中を覗くと、無数の針穴からの光が、星空のように見えるものであった。これは全く異なる二面的なイメージの彫刻作品で非常に面白い試みである。

インタビューでも触れていたが、1980年代や90年代初期にはどちらかというと抽象的な彫刻作品が多かったが、1990年代後半から2000年代においては具象的なイメージの彫刻作品が入選することが増えている。佐藤氏

の作品については巨大な頭部というモチーフで、量感を重視する描写的な表現でありながら、その内部において光と闇を素材としたイメージに置き換えられていることは具象と抽象的なイメージを双方もつ大変意欲的な設計や狙いになっている。また、それを実現させたのはFRPという樹脂、これは現代的な素材である。同時に地域振興という純粹芸術とは異なる視点の要請にも応えるものになっているところが秀逸である。

また、西澤利高氏の『UNTITLED』という大理石の作品は抽象的な形態を持つ作品で、素材も白い大理石という古典かつモダンな要素が強い作品であるが、作品が設置された場所がアクトビレッジおのであり、その風光明媚なロケーションとの相性が抜群であった。これは設置計画において展示委員の判断がうまく機能した例であると言える。

「UBEビエンナーレ」のアーティスト・イン・レジデンス部門から選ばれた豊福亮氏の『UBEラビリンス』は、作家とそのチームが旧吉部小学校に滞在し、木板にペンキで彩色する制作を行い、小学生が参加してペイントするワークショップも行った。作品制作ワークショップだけでなく、メンテナンスのためのワークショップも行っており、その考え方も斬新で興味深い。これは野外彫刻であるが材料が腐食しやすい木材であること、その相反する要素に対する一つの回答を作家と地元の担当者が相談することで導き出していることは特筆に値すると思う。

ここで聞き取りの中で説明されていた彫刻作品の3つの形式の種類についてここにまとめておく。

形式（1）作家の自由な発想でミニチュア模型を提案し、採用されたら実作を作る方法。

例：『じいちゃんの鼻の穴に宇宙があった』  
佐藤圭一、『UNTITLED』西澤利高

形式（2）作品の設置場所を決めて、その場所に合わせて作品を考案する方法。

例：『UBEラビリンス』豊福亮

形式（3）作家が現地に滞在して制作するアーティスト・イン・レジデンスの方法。

例：『UBEラビリンス』豊福亮

佐藤氏、西澤氏の作品については形式（1）にあたり、「UBEビエンナーレ」のコンクール用に発案されたミニチュア模型を元にしてはいるが、最終的には形式（2）に近い形で設置された場所に相応するものになっている。形式（3）、形式（2）に当たる作品としては豊福氏の作品が相応する。（注8）

#### 3-3 吉部小学校、生徒会などのこと

吉部小学校は吉部中学校の統合により、吉部小学校の

校舎跡をアートフェスタに有効活用することから始まっている。そのため、「UBEビエンナーレ」の受賞作品が校舎の入り口に設置され、ランドマークやアートによる地域振興の広告塔のような形で活用されている。彫刻が設置されたことで今までの校舎とは違う使用方法になったという意図が地域住民に強く伝わってきている。

この彫刻作品が設置されてことで、校舎の奥にあった旧船木鉄道で使われていたトンネルの再発見と再利用（コンサートやミニSLなど）という、地域資源の活用にも繋がってきている。

また、「生徒会」という名称で募集したグループ企画は、地域の事業者の声をかけ、カフェとしてランチを提供してもらい、展覧会やイベントなどの会期中に来場者をもてなしたり、事業として利益を上げてもらうことを意図した企画である。これは後に「生徒会」が行政から委託を受け自主運営する形に変わってきている。

2015年から2019年の間に、3度の「UBEビエンナーレ」とその間の年を2回経てきたが、ビエンナーレ本展に当たる年以外も、この「生徒会」を中心に地元の“お祭り”と絡めた企画などを含む様々なイベントを仕掛けている。このことは回を追うごとに地域住民の期待に応える活動として認知されてきている。

### 3-4 全体、今後のこと

廣中部長も越智係長も語っていたのは、この北部地区を今後も盛り上げていくために、ある程度の基本的な基盤や手法は整ったのではないかとということである。また今後の行政としての支援は旧吉部小学校とアクトビレッジおのに集約し、他の地域についてはできるだけ地域の事業者や民間のボランティアなどの力で自主的に活動し、自立していく方向性にしたい。ただ、企画の多様性や、住民のニーズに合わせていく努力は必要であるので、イベント内容については行政も積極的に新しい内容を盛り込む努力を続けたいとのことであった。

ここで冒頭に触れた「UBEビエンナーレ×まちじゅうアートフェスタ（UBEアートフェスタ2019）実施報告書」（注9）で報告されている来場者数について述べる。これは「第28回UBEビエンナーレ」、「まちなかアートフェスタ」、「うべの里アートフェスタ」、「宇部市芸術祭」の4つの企画を「第28回UBEビエンナーレ」×「まちじゅうアートフェスタ」としてまとめたもので、2017年には全体の来場者数は165,763人であり、2019年の目標来場者数は180,000人であるが、実際報告された来場者数は180,739人であった。つまり全体の2017年から2019年にかけて来場者数は14,976人の増加であった。このうち「うべの里アートフェスタ」の増加率は2017

年が23,861人で2019年が33,733人ということで9872人の増加であった。この一万人近くの増加人数は全体の増加人数の約66パーセントにあたり、新規加わったエリアで新たな伸び代があったとエリアということもあるが、全体の来場者数の増加に相当貢献できたことはこの数字からも明らかである。

よく語られることではあるが、行政の担当者が3-5年で他の部署に異動するため、地域での企画における首尾一貫性や持続ということの課題については常に気になる部分である。新型コロナ流行に関してはこの状況に対応している最中ではあるが、今までは集客すること、持続することに注力していたが、適切な距離を取ることや自粛の要請はそれと相反する要素であり、インターネットなどを使うことや新たな繋がりを検討する必要に迫られているとも思える。

## 4 総括として

宇部市北部地区での2015年から4年間のアートフェスタの取り組みにおける美術による地域振興として肯定的成果と課題要素をあげる。

（肯定的成果）

- 1) 一定以上の美術的な水準を満たす彫刻作品には三種類の形態と設置方法があり、同市内に国内外で認知された彫刻展があり、優秀作品から選定された作品が、北部地域の実情と景観とを合わせて供与される。
- 2) 使われなくなった校舎や空き家などの活用できる施設や、自然や歴史を含む手付かずの地域資源が豊富である。
- 3) 行政、市民、業者、教育機関、現存する芸術家などの協力者に恵まれている。
- 4) 市民や幅広い業種の業者の賛同と協力が得られ、一年を通じてある程度の資金的な利益をあげることができ、客や参加者のリピーターを生んでいる。
- 5) 彫刻作品の3つの形式について行政や市民がある程度理解して異なる作品内容や環境およびその状況に対応できている。

（課題要素）

- 1) 市の中心部とは距離があり、移動手段が限られていること。
- 2) 彫刻作品の維持管理については作品の材質や形態によっては常にメンテナンス維持費が必要である。これは空き家や廃校などの使用期限が切れた建物施設においても同様である。
- 3) 純粋芸術と商業には対立する要素があり、イベントや企画内容について全体を俯瞰的にコントロールできる視点が常に必要である。

宇部市北部地区での美術による地域振興として北部農林振興部地域振興課関係者からの聞き取りを元に2015年から4年間のアートフェスタの取り組みを考察してきたが、今後は行政からの視点だけではなく、作家、事業者、地域住民の意見なども交えて考察してみたい。

尚、本稿については1960年代の高度成長期の宇部市の緑化運動、1961年の「第一回宇部市野外彫刻展」から始まる宇部地域の文化振興については先行事例がたくさんあるもののまだ多くの未調査の部分があると思えるので、引き続き調査分析を広げて行き、美術と地域振興の関係について社会の一助となる内容にして行きたい。



図1 宇部市北部地区（注10）



図2 宇部市北部農林振興部(北部総合支所)会議室にて



図3 宇部市北部総合支所外観



図4 旧吉部小学校(宇部の里アートフェスタメイン会場)



図5 宇部アートフェスタ2019のパンフレット



図6 旧吉部小学校前に設置された彫刻作品。UBEビエンナーレでの買い上げ作品。『じいちゃんの鼻の穴に宇宙があった』佐藤圭一 第25回UBEビエンナーレ島根県立石見美術館賞・緑と花と彫刻の博物館賞受賞作品の常設展示。



図7 同作品の内部風景。祖父頭画像の鼻の穴を覗く。内部には針穴による星空のような空間が広がる。



図8 旧吉部小学校の裏山にある旧船木鉄道のために作られた大桐トンネル、レンガでできている。船木鉄道開通期間 大正15年11月—昭和19年3月



図11 『UBEラビリンス』豊福亮

2018年に実施したアーティスト・イン・レジデンス事業で採用された作品。市内の小・中学生およそ500人がワークショップに参加して制作されアクトビレッジおのに設置された。



図9 鉄道敷跡、再現された旧大桐駅。



図12 『UBEラビリンス』の看板上空からの画像を含む。

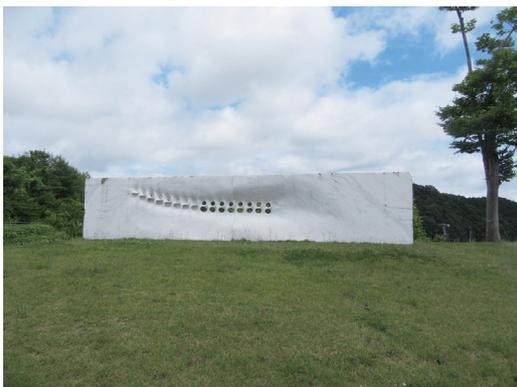


図10 『UNTITLED』西澤利高 第26回UBEビエンナーレ 山口銀行賞作家寄贈

大理石でできた彫刻作品、規則的に穴が開けられており、両面から鑑賞できる。穴にはらせん状のねじれがあり、森羅万象の様々な事象における螺旋やねじれを彷彿とさせる。



図13 幾重にも重なるワークショップで彩色されたUBEラビリンスの部分(図2-13の写真は全て著者撮影)

## 謝辞

最後になりましたが、調査等でお世話になりました山口県宇部市吉部地区地域振興課の廣中昭久氏、越智英和氏、馬場葉子氏、青山佳代氏他、多くの方々にご協力いただきました。厚く御礼を申し上げます。

## 注

- 1 中野良寿代表は文部科学省科学研究費補助金基盤C、2010-2012「地域活性化のための美術連携事業の調査研」において、地方都市における文化施設や教育機関等が相互に美術による地域連携の調査を行った。事例としてカナダ、イギリス、金沢、東京、直島などを訪ね各地域における実践例を考察した。その結果、地域連携の方法として環境に関する観点と芸術政策を連携させたプロジェクトなどの今日的なモデルを提案した。
- 2 高橋正明、「観光と文化活動による地域の活性化—岡山県牛窓町の場合—」大手前女子大学論集22、1988年
- 3 大林剛郎、「都市は文化でよみがえる」集英社新書 2019年、p.31
- 4 2000年から続く新潟の里山を舞台にした現代美術展、初期からの流れが本書にまとめられている。北川フラム+大地の芸術祭実行委員会、『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2018 公式ガイドブック』現代企画室、2018年、pp.242~251
- 5 FRPとは繊維強化プラスチックプラスチックのことでFiber Reinforced Plastics の頭文字を取ってFRPと呼ばれている。
- 6 ホビーフェスはホビー・フェスティバルの略称。「生徒会」が行なっている様々な趣味コミュニティーや業者との共同イベント。プラモデル、ラジコン、ミニ四駆、鉄道模型、エアガンなどがある。
- 7 わらアートは2016年に発足した「NPO法人 わらアートJAPAN」として全国各地でわらによる造形制作活動を行なっている。  
<http://waraartjapan.com/about> (2020年9月閲覧)
- 8 この形式(1)に当たる彫刻作品については以下の橋本忠和著「日本における環境芸術と地域社会の関係性の変遷に関する一考察」において分類された「①環境芸術の萌芽期・・・1950~1960年代」にあたり、その時期からの形式の維持と更新については議論の余地があるが、大きくは変化していない。  
橋本忠和、「日本における環境芸術と地域社会の関係性の変遷に関する一考察」環境芸術(11)、2012年、p.72
- 9 まちじゅうアートフェスタ実行委員会編、「UBEビ

エンナーレ×まちじゅうアートフェスタ(UBEアートフェスタ2019)実施報告書」宇部市 観光・シティプロモーション推進部UBEビエンナーレ推進課、2020年、p.1

- 10 宇部市の中山間地域地図(宇部市役所公式HPより)  
<https://www.city.ube.yamaguchi.jp/machizukuri/chuusankan/gaiyou/index.html> (2020年9月閲覧)

## 参考文献

- ・大林剛郎、「都市は文化でよみがえる」集英社新書、2019年
- ・高橋正明、「観光と文化活動による地域の活性化—岡山県牛窓町の場合—」大手前女子大学論集22、1988年

## 付記

本稿の作成にあたり、1のはじめにを福田が他は中野が担当した。実地調査は2名で行い中野がまとめた。